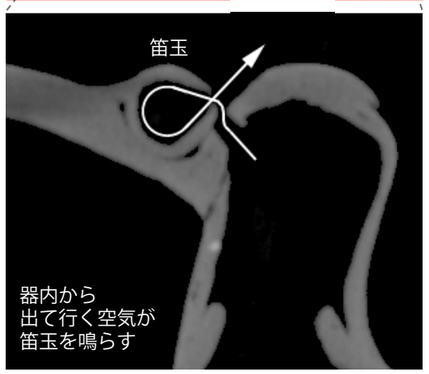
アンデス文明は優れた陶芸作品で知られるが、とくにボトル型の土器が充実しているという点が世界の諸文明の中でも特徴的である。

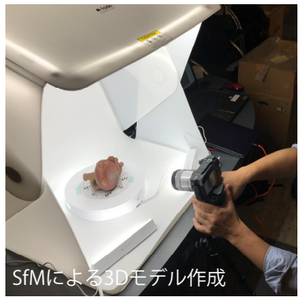
口縁部が小さくすぼまったボトルの形状は、組み立ての時点で製作者の指や工具がどのように内部に入りえたのか、そしてどのように抜いたのか、という謎を投げかけてくる。



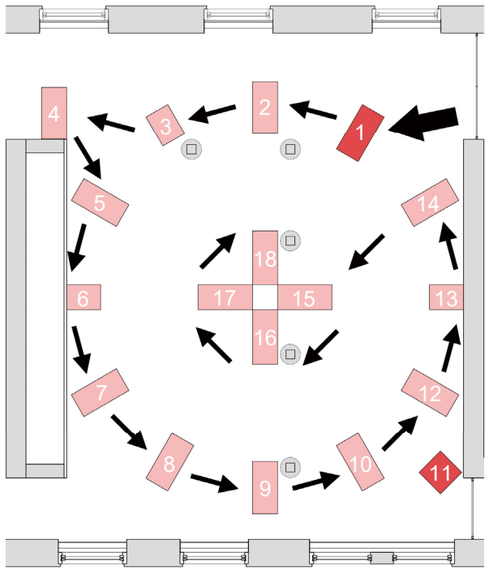
またボトルの内部は液体と気体がせめぎ合いながら移動する空間であり、中には内蔵されたホイッスル<笛玉>へと空気を誘導し、音を鳴らす機能を持つ複雑な笛吹きボトルもある。

こういった古代アンデスのボトルの形状は静態的にではなく、人体／工具や液体／気体が入り、そして出ていくという動態的な視点で捉え直す必要があるのだ。

古代の陶工の思考をたどるために、研究者もまた身体とデジタル技術を駆使してボトルを組み立てる。



本展は古代のボトルビルダーと、現代のボトルビルダーの競演である。



<会場構成>　館内での三密を回避し、ソーシャルディスタンスを確保すべく、特別展会場は距離確保と回遊性を両立した空間構成とした。博物館の展示空間における「新たな近接性」を探求する展示試行実験である。

特別展示『ボトルビルダーズ――古代アンデス、壺中のラビリンス』

展示会期：2020年9月24日[木] ー 2020年11月29日[日]
展示会場：東京大学総合研究博物館小石川分館／建築ミュージアム
所在地：東京都文京区白山3ー7ー1
開館時間：10時ー16時30分 (入館は16時まで)
休館日：月・火・水曜日 (いずれも祝日の場合は開館)、その他博物館が定める日
入館料：無料
入館手続：入館の際に入館手続きがございます。（事前予約は不要です）
電　話：050-5541-8600（ハローダイヤル）
主　催：東京大学総合研究博物館
共　催：BIZEN中南米美術館、岡山県立大学、東海大学文明研究所／マイクロ･ナノ研究センター
協　力：東京大学駒場博物館、科学研究費 新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学・文明創出メカニズムの解明」
建築博物教室：「土笛のアーキテクチャ」解説：真世土マウ（岡山県立大学）
2020年11月14日[土]実施予定。詳細については展示ウェブサイトにて。

展示製作者・協力者
学術デザイン企画：鶴見英成（東京大学総合研究博物館 助教）
会場構成：松本文夫（東京大学総合研究博物館 特任教授）
小石川分館：永井慧彦（東京大学総合研究博物館特任研究員）
資料研究・レプリカ制作：真世土マウ（岡山県立大学）
資料研究：森下矢須之（BIZEN中南米美術館）、山花京子（東海大学）
X線CT撮影・データ処理：前川 優、佐々木智彦（京都大学）
SfMによる3Dモデル作成：中尾 央（南山大学）、金田明大（奈良文化財研究所）、田村光平（東北大学）、野下浩司（九州大学）
映像協力：亀井 岳
撮影協力：古木洋平

（2020年9月発行　編集：鶴見英成）

ボトルビルダーズ

古代アンデス、壺中のラビリンス

東京大学総合研究博物館
小石川分館
特別展示

ペルー北海岸　チムー文化（850〜1470年）

動物像付き双胴笛吹きボトル

リャマ像。アンデス文明のほぼ最終期の作で、型で複製した二つの胴を接続している。中途まで水を注ぐとそれぞれの胴に空気が分かれて入り、傾けると水に押された空気が笛を鳴らす。

（東京大学総合研究博物館蔵）

エクアドル太平洋岸　チョレーラ文化（前1000年〜前100年）

鳥像付き双胴笛吹きボトル

文明形成期のきわめて古い双胴ボトルの例。双胴ボトルに中途まで水を入れて揺らすと、筒を通じて空気と水が複雑に行き来し、鳥のさえずりのように音程やリズムに変化のある音が鳴る。

（BIZEN中南米美術館蔵）

エクアドル太平洋岸　チョレーラ文化（前1000年〜前100年）

動物像付き双塔形笛吹きボトル

ペッカリー（ヘソイノシシ）像。胴部は単一の部品だが、両端が「双塔形」に立ち上がっている。二つの胴を連結した「双胴」と同様、水を入れれば傾けただけで鳴り、揺らせば鳥のようにさえずる。

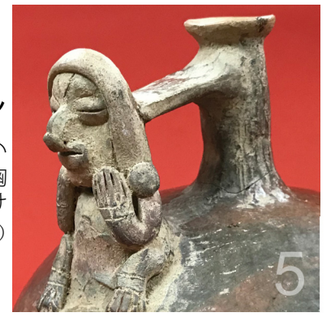
（BIZEN中南米美術館蔵）

エクアドル太平洋岸　チョレーラ文化（前1000年〜前100年）

動物象形長頸笛吹きボトル

ペッカリー（ヘソイノシシ）像。双胴や双塔形でない器は、注口から息を吹き込むか、笛を水面上に保ちつつ注口を水中に沈めて鳴らす。音は基本的にまっすぐ伸びるが、揺らし方によっては変化が生じる。

（BIZEN中南米美術館蔵）



エクアドル太平洋岸　バイーア文化（前500年〜650年）

人物像付き長頸笛吹きボトル

あごの下に孔があり、頭部そのものが笛玉になっている。器内から押し出された空気は人物の胴を通って胸の孔から吹き出し、あごの孔へ適切な角度で吹きつけられ、音が鳴る。

（BIZEN中南米美術館蔵）

ペルー南海岸　パラカス文化（前300年〜紀元前後）

鳥像付き橋付きボトル

パラカス文化の典型的な笛吹きボトルの形で、鳥の頭頂部に孔もあるが、息を吹き込んでも鳴らない。X線CTにより笛玉を持たないことが判明した。外観だけでは実態が判断できないという好例。

（東京大学駒場博物館蔵）

ペルー北海岸　古典クピスニケ文化（前1200〜前800年）

動物像付き双塔形笛吹きボトル

ペルーでは後に双胴ボトルが量産されるが、原型はエクアドル同様にこのような双塔形であろう。反った口吻、蹄状の四肢から、モチーフもエクアドルに例の多いペッカリーかも知れない。

（東海大学文明研究所蔵 資料番号11571-282）

ペルー北海岸　ビクス文化（前100〜400年）

鳥像付き鐙型笛吹きボトル

馬具の鐙のように中途が二股になった鐙型ボトルはアンデス文明に特徴的だが、笛吹きの例は少ない。鳥の頭部はビクス文化期に発展した工夫の一例、笛玉をドーム状に覆う共鳴室である。

（東京大学駒場博物館蔵）

ペルー南海岸　ナスカ文化（紀元前後〜800年）

人物像付き双胴笛吹きボトル

地上絵で有名なナスカ文化は多彩色の土器を発展させた。人物の頭部はビクスの展示品と共通する共鳴室で、内部の笛玉との間に空間があり、音を力強く響かせる。

（BIZEN中南米美術館蔵）

ペルー南高地　ワリ文化（550〜900年）

人物像付き双胴笛吹きボトル

埋没したあとに土壌が詰まってしまったため、半裁レプリカには現れていないが、ビクスやナスカの展示品と同様に、頭部は共鳴室であり、中に一回り小さな笛玉が入っている。（東海大学文明研究所蔵 資料番号9983-173）

ペルー中央海岸　チャンカイ文化（1000〜1400年）

鳥像付き双胴笛吹きボトル

型で複製した胴部を連結しており、従来より生産効率が高い。器や像の内部ではなく外部の橋状把手に笛を設けたのも、作りやすさ重視の設計である。

（東海大学文明研究所蔵 資料番号11571-703）

エクアドル太平洋岸　バイーア文化（前500年〜650年）

笛吹き土偶

後頭部に吹き口を持つ、二つの笛玉を内蔵した女性像。同時に二つの音が鳴る。笛玉を鳴らした呼気は前後の孔から抜け、孔を指でふさぐと音程が変わる。吹奏を目的とした設計である。（BIZEN中南米美術館蔵）

ペルー北海岸　チムー文化（850〜1470年）

鳥像付き双胴笛吹きボトル

仕上げが粗いため、胴部を左右から型で挟んで作ったことが外観のゆがみにも現れている。ボトルの多くはおそらく酒器であり、質より量を要する、大王国チムーの政治的饗宴を物語る。

（東京大学総合研究博物館蔵）

ペルー北海岸　チムー文化（850〜1470年）

人物・鳥像付き鐙型笛吹きボトル

吹き矢で鳥を狙う光景。チムーに約800年先立つモチェ文化の鐙型ボトルを模倣した品。X線CTで確認された底部内面中央の放射状の筋は、成形後そこから指を抜くチムーの技法の証である。

（BIZEN中南米美術館蔵）

ペルー北海岸　ビクス文化（前100〜400年）

鳥象形橋付き笛吹きボトル

アメリカ大陸原産のカモ（バリケン）。連結笛玉を頭部の共鳴室で覆い、力強い音を発する。笛吹きボトルの多くが人物・動物を題材とするが、音で生命を表現したとも考えられる。

（BIZEN中南米美術館蔵）

ペルー北海岸　ビクス文化（前100〜400年）

人物象形双胴笛吹きボトル

ビクス文化の土器は荒々しい造形が特徴的だが、共鳴室内や連結笛玉など笛吹きボトルの技工は繊細である。音は土器の形や素材をいかに規定するのか。考古学の新たな課題が浮上した。

（BIZEN中南米美術館蔵）

ペルー北海岸　チムー文化（850〜1470年）

棒を抱える人物像付き三胴笛吹きボトル

三つに分かれた胴部は塊茎、おそらくキャッサバ（タピオカ）を表す。器内からの空気の噴出に、笛玉の孔を的確に合わせる作業は繊細で、微調整の効くこの作りは合理的である。

（BIZEN中南米美術館蔵）

ペルー北海岸　後期クピスニケ文化（前800年〜前500年）

人物像付き双塔形笛吹きボトル

ペルーの双胴ボトルの原型と考えられる、文明形成期の双塔形の例。きわめてまれな器形だが、リング状に肥厚する注口、平らな底部などは後期クピスニケ文化のボトルの特徴である。

（東海大学文明研究所蔵 資料番号11571−347）